U.S.S.R.
21ソビエト編　ロシア文部省文学賞受賞
青い海・白い船

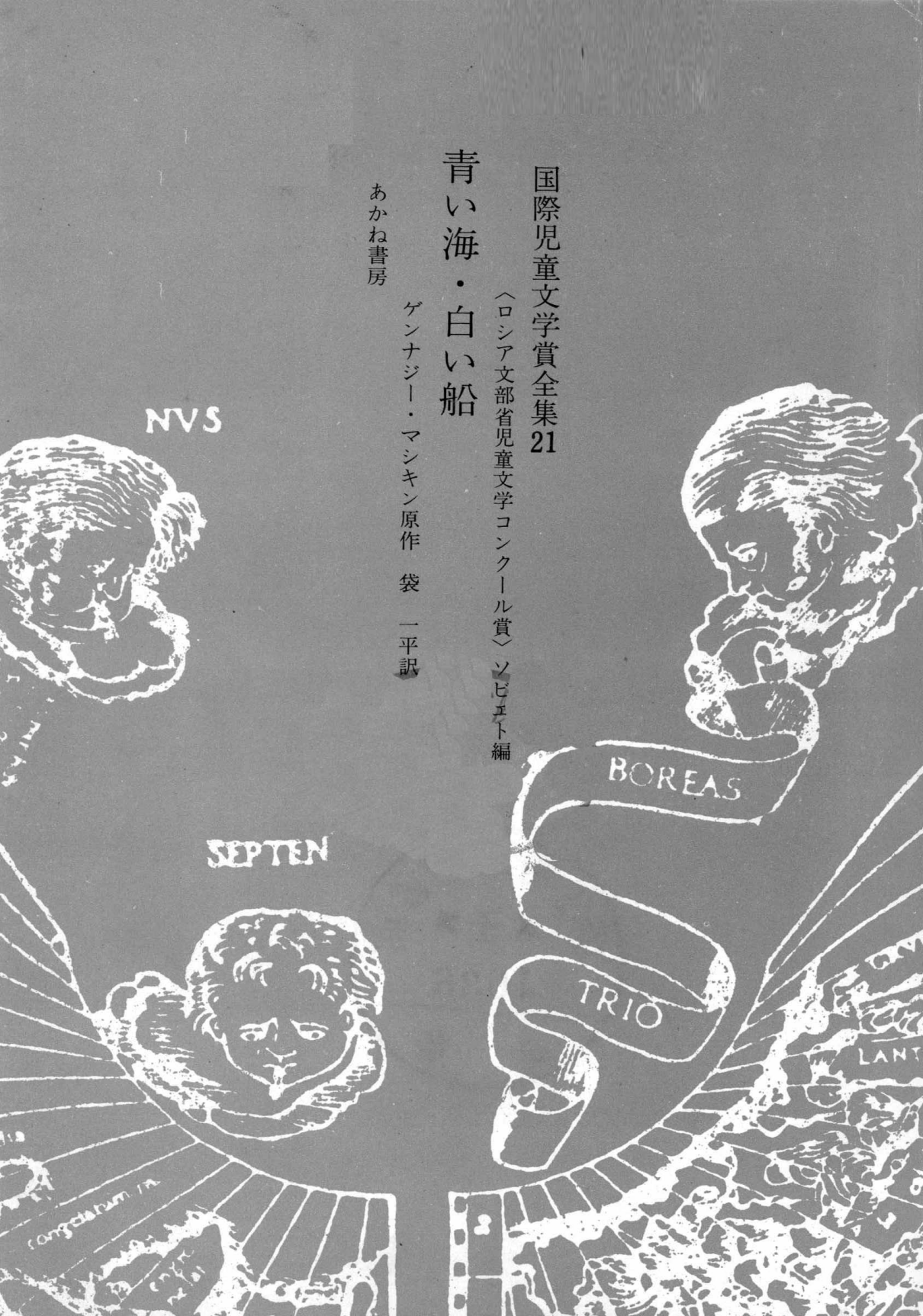
国際児童文学賞全集21

〈ロシア文部省児童文学コンクール賞〉ソビエト編

青い海・白い船

ゲンナジー・マシキン原作　袋　一平訳

あかね書房

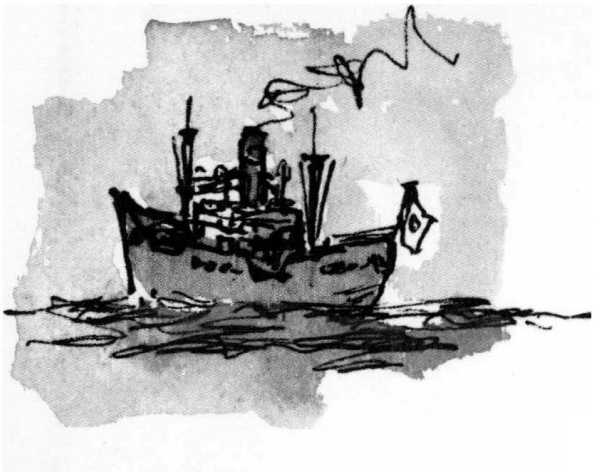


★国際児童文学賞全集㉑
★青い海・白い船
★定価四八〇円
★一九六八年一月二十日発行
★訳者＝袋一平
★発行者＝岡本陸人
★本文印刷＝株式会社　文弘社
★オフセット印刷＝錦明印刷株式会社　明治印刷株式会社
★製本＝土開製本株式会社
★発行所＝株式会社あかね書房
東京都千代田区西神田三－二－一　電話東京(二六三)〇六四一(代)
★振替東京六四一五〇番

NDC 980

マシキン，ゲンナジー
青い海・白い船
あかね書房　1968
257p 22cm (際児童文学賞全集 21)
内容：ロシア文部省児童文学コンクール賞
青い海・白い船（ゲンナジー・マシキン作
袋一平訳）

著訳者との契約により検印なし



はじめに

おとなは戦争します。そこで、子どもは戦争ごっこしてあそびます。日本軍にひどいめにあったロシア人の家の子どもは、日本人にしかえしする戦争ごっこをします。

ゲラも、そういう少年のひとりです。

ゲラは、南サハリン（旧カラフト）にきます。ここは、むずかしい土地です。ロシアから日本の手にわたり、第二次世界戦ののち、またロシアにもどりました。そのころはまだたくさんの日本人がのこっていました。

ゲラは日本の子どもたちをノックアウトするつもりで、はりきっています。だが……ふりあげた手は、しぜんにさがって、あたたかい日本の子どもの手を、にぎっています。

どうして、そんなことになったのでしょうか？

袋　一平

もくじ

もくじ

はじめに…1
1 かたきうち…6
2 戦友…21
3 アルバムの絵…30
4 ちぎれ雲…41
5 敵前上陸…58
6 すみこ…75
7 金魚…90
8 ふえの音…104
9 まるい月…117
10 つゆの玉…130

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

11 お茶のつどい…144
12 火事…160
13 追跡…171
14 あらし…189
15 さかまく波…199
16 だれの罪…210
17 たばこの葉…219
18 トンネル…231
19 汽笛…241
あとがき 袋一平…254
そうてい＝沢田重隆（AD）坂野豊（D）
さしえ＝桜井誠

■著者紹介

ゲンナジー・マシキン（ГЕННАДИЙ НИКОЛАЕВИЧ МАШКИН）は、1936年、ハバロフスク市に生まれる。その後イルクーツク市に移り、1959年、採鉱技師、地質学士の免状をとる。シベリアの密林を歩きながら、小説を書き、「青い海・白い船」で、ロシア文部省児童文学コンクール賞に入賞する。詩人のエフトゥシェンコすいせん作品。

■訳者紹介

袋一平＝1898年、東京の下谷に生まれる。東京外語ロシア語科卒。ソ連の映画の紹介、児童文学、冒険推理、ＳＦなどの普及につとめる。イリーン「人間の歴史」ガイダル「学校」メドウェーデフ「バランキン君のふしぎな１日」など訳書多数がある。

ГЕННАДИЙ НИКОЛАЕВИЧ МАШКИН

СИНЕЕ МОРЕ, БЕЛЫЙ ПАРОХОД

ゲンナジー・マシキン原作

袋　一平訳

青い海・白い船

ソビエト編〈ロシア文部省児童文学コンクール賞〉

1　かたきうち

「戦場まで、歩いてはいけないよ。」

ぼくは仲間にいった。わが軍が南サハリン（南カラフト）にすすんだ、というニュースをきいたその日のことである。

「とにかく、このハバロフスク市から、ぬけだすことがかんじんだ。」

スコペンドラがいった。ほら穴のなかに、四角い銃眼から、日の光がさしこんで、スコペンドラの赤毛のさきが燃えるように見えた。

「パパの荷車に乗っていくか？」

ボリカがいった。

「あんなおんぼろぐるまでは、すぐこわれちまうよ。」
スコペンドラは反対した。
「も、もう一度、き、きみのパパに、手紙をかくんだな。」うすくらがりのなかで、手をふって、レシクがいった。「きっと《メルセデス》(ドイツの自動車のなまえ)を持ってきてくれるぜ。」
「持ってきてくれるだろうな。ハーモニカだって、たのんだら、ちゃんと送ってくれたもの。」
ぼくはこたえた。
そのハーモニカは小包で送られた。《メルセデス》みたいなものなら、自分で持ってきてくれるだろう。パパはちょうど除隊になって、まもなくドイツから家に帰ってくるはずだ。ハーモニカの小包のなかに、そのことをかいた手紙がはいっていた。その返事のなかで、ポンコツでもけっこうだから《メルセデス》みたいな軽自動車をひろってきてください、とかいた。それはぼくたちの

仲間にとって、ずいぶん役にたつだろう。

「それにしても、ハーモニカはおしかったな。」ボリカは、バラライカ（ロシアの弦楽器）で、かなしげなワルツ《オーバー・ゼ・ウェーブス》をひきはじめた。「あれがあったら、オーケストラができたのに……ぼくは、バラライカ、きみは、ハーモニカ、スコペンドラは、フルート、レシクは歌をうたうだろう。」

ほんとに、ハーモニカは市場で、かたパンにかえなければならなかった。ぼくの病気の弟ユリクは、ミルクにひたして、やわらかくしたかたパンがだいすきだ。さもなければ、ぼくは、けっしてハーモニカを、ママにはわたさなかったろう。ハーモニカは、ぼくとユリクに、といってパパが送ってくれたものである。

「戦場にでたら、ひとつ吹奏楽団をつくろうじゃないか。ぼくはいちばん大きいラッパを吹くよ。」スコペンドラはこぶしを口にあてて、ほおをふくらませた。「プウム・トルルウ・ウム……。」

「やめろ！　もっとたいせつなことを考えるんだ……。」

ぼくは仲間をおさえた。

「ぼ、ぼくはゆうべ、パパのゆ、ゆめを、み、みたよ。」

レシクがしずかにいった。

ぼくたちは首をさげた。レシクの父は、日本軍と張鼓峰で戦って、戦死した。だからぼくたちは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

レシクの父のため、そしてまたぼくの祖父のために、復しゅうするつもりであった。家の壁にかかっている写真で見ると、祖父はひげをピンとはねあげ、手をサーベルのつかにかけて、どうどうたるふうさいである。一九二〇年、日本軍は、祖父を機関車のかまにいれて焼きころした。ぼくは極東パルチザン（ゲリラ）戦記という本で、それを読んだ。

はじめ占領軍は、ハバロフスクと極東全域の平和と秩序をたもつために戦う、というふりをしていた。ところが、パルチザンの部隊がコルチャック軍をハバロフスクから追いはらうと、日本軍は歯をむきだした。自分の手先のコルチャック軍にかわって、ソビエト政府をたおそうとした。

そこで日本軍ははかりごとをもちいた。しろず将軍がそのときの新聞にだした日本軍撤退の記事を、ぼくはいまもそらでおぼえている。

《みなさんと、こんなにおちかづきになり、うちとけた友人のまじわりをむすんだ、この極東の都市を立ちさることは、まことにざんねんです。建設と、平和および秩序の維持に成功なさいますことを、心からのぞんでいます。》

だが、あくる朝、日本軍はハバロフスクを砲撃しはじめた。パルチザン部隊は退却しなければならなかった。

おばあちゃんの話によると、家族にわかれをつげるために、祖父は家にたちよった。これが祖父の命とりになったのである。

密林にかくれた部隊に追いつこうとして、祖父は日本軍に見つかり、足を撃たれて、つかまえられた。それから日本軍は、きずついた祖父を、機関車のまっかに焼けた、たきぐちになげこんだ……。

おばあちゃんのトランクの底には、その機関車のたきぐちの金物のかけらが、一つしまってある……ぼくは燃えているストーブのたきぐちを、へいきでながめることはできない。まっかな火床を見ると、なにかつめたいものが、ゾクッと背中をはしる……。

「オーケストラでは復しゅうはできないよ。」

ぼくはげんこつでデスクをたたいた。

「そんなら、あした出発しよう。歩いてでも……。」

スコペンドラは鼻をこすった。

「でも、もうすこし待ったほうがいいんじゃないかね？　パパがもうすぐ帰ってくるはずだから。」

ぼくはすこしためらった。

「どうせ冒険はかくごのうえだ。そんな《メルセデス》なんかを待っているうちには、戦争はおわっち

まうぜ。」
スコペンドラはいった。
「まさか……。」レシクは信じられないような顔をした。
「いや、なにがおこるか、わかったもんじゃない。だからいそがなけりゃならないんだ。」
スコペンドラはきっぱりいって、ぼくたちの武器をつつんだぼろぶろしきをさしだした。
「ではあしたの朝、九時きっかりにここに集まる。」
そういって、ぼくはもう一度ぼくたちの武器をあらためた。大口径機関銃のたま、ふるぼけた火なわ、石を投げるための新しいパチンコ、レシクがこしらえた信号弾など。もちろん、あまりじまんになるほどのものはないけれど、なにか役にたつこともあるだろう。ぼくはそれをまた包みなおして、立ちあがった。
「さよなーら。」
ぼくは日本語でいった。
「じゃ。」
「あしたね。」
「日本のサ、サ、サムライたちをたたきつぶせ。」
ぼくたちは学校のサークルで、もう二年ばかり、日本語を習っていた。このどうくつ本部では、でき

るだけ日本語をつかうことにしていた。パルチザンは、敵方のことばを知らなければならないのだから。しかし仲間はなまけて、さっぱり日本語をつかわなかった。

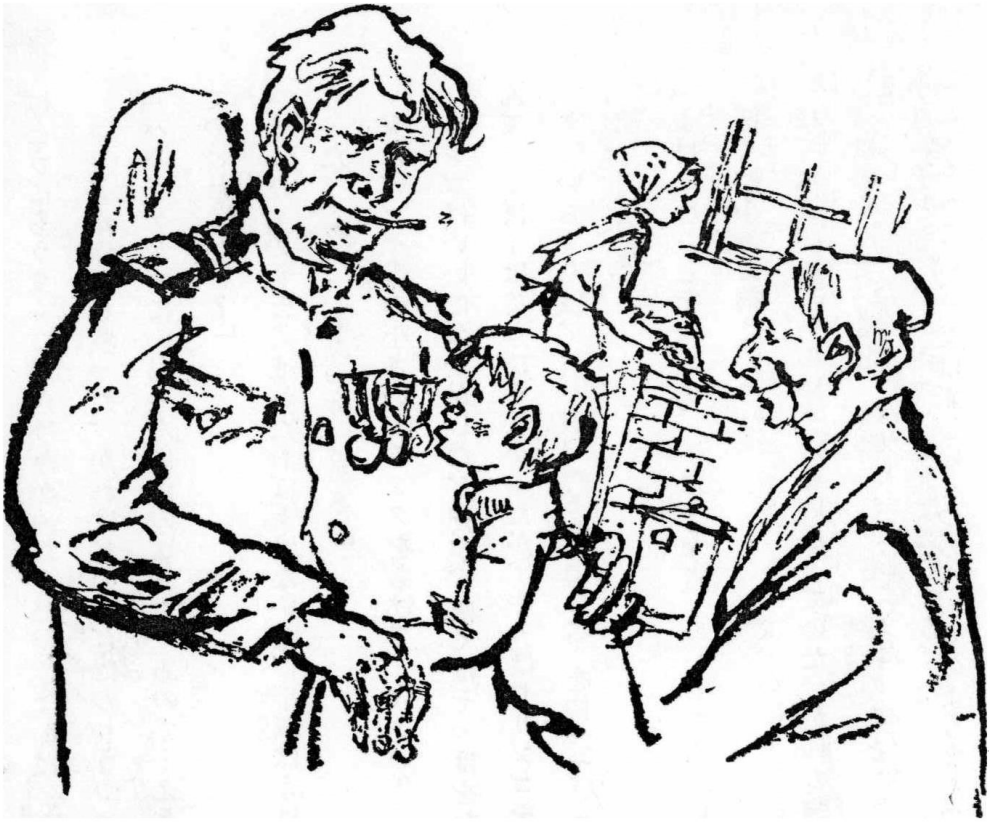
ぼくは畑のあいだをとおって、家にのぼっていった。土間にとびこもうとして、たちどまった。通りにむかった木戸があけはなしになっていた。どうしたのだろう？　ネコがしのびこんで、畑を荒らすといって、ママがいつもやかましくいってるのに……。

ぼくはつなをかけて木戸をしめ、家のなかにはいった。

へやのまんなかの曲げ木のいすに、たばこ色の軍服をきた人がこしかけていた。軍服の胸には勲章がいくつかさがっていた。肩章には、一本のふとい銀すじ。それは上級軍そうの父であった。

右ほおにふかいしわがあって、わらっているように見えた。口に巻きたばこをくわえている。髪の毛はちぢれて青っぽく、目はおちくぼんで、いかにもつかれているふうだ。ぼくはすぐ気がついた。父とはあまり似ていないのだ。ぼくは母に似ている。まる顔で、すなおな髪の毛はマツの木の皮のような色をしている。ただ鼻だけは父とおなじようだ。とんがった、かぎ鼻である。

「こっちへこい。」父は新しいくつのきしりのような声でいった。兵隊はよくそんな声をだすらしい。



ぼくは鼻がむずむずしてきた。やっと《メルセデス》だ。でも、どこにあるんだろう！　ことによると、駅のホームにでもおいてきたのかな？

ママはフライパンでプディングを焼いていた。おばあちゃんは、父のすぐまえのこしかけにすわって、ドイツのお天気のことをきいている。そのひざにユリクがのって、父の勲章をいじっている。

「パパ、こんなきれいなものを、どうしてもらったんだい？」

ユリクは勲章をチャラチャラならした。

「手がらをたてたからさ。」

父はふしくれだった指で、ユリクの頭をなでた。

弟のあまったれめ。そうおもったが、ぼく

はどうにもうまく口がきけなかった。だいじなことをきかなければならないのに……。

ユリクがぼくを救った。かれは父のひざにのりうつって、またあまったれた。

「パパ、ゲルカにいちゃんにたのまれた、あの……ええと……《メルセデス》とかいうのを、持ってきてやったのかい？」

「そんなものをたのまれたおぼえはないな。手紙はうけとらなかったよ。」父はこたえた。みんなはわらった。「だが、おみやげはある。」

父はベニヤ板の小さいトランクをあけて、大きいリンゴをとりだした。

リンゴはいいにおいがした。だが、ぼくはそっぽをむいた。《メルセデス》のかわりに、リンゴだなんて……ぼくはくちびるをかんだが、やっぱりリンゴをうけとった。

「おにいちゃんは、パパが、《メルセデス》を持ってくる、といったじゃないか。」

弟はいった。

「よけいなことをいうな。へたすると、リンゴをもらいそこなうぞ。」

ぼくは小声で弟にいった。

ぼくはこの病弱の弟をかわいがっていた。かれのおもちゃで、何時間でもあいてをしてやる。いっしょにあそんでいると、戦争のことも、学校のことも、じゃがいもやパンのことも、いっさい知らない小さい子どもに、かえったような気になる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com